

弘前城本丸石垣修理 令和元年度記念イベント

現場遺構公開説明資料

令和元年8月11日(日)

弘前城本丸石垣解体工事は、昨年度で終了し、現在は総合的な課題について石垣修理委員会や文化庁と慎重に協議を重ねているところです。

今回は今しか見ることのできない出角石垣と井戸遺構を間近に見ていただきながら、遺構の概要について説明します。

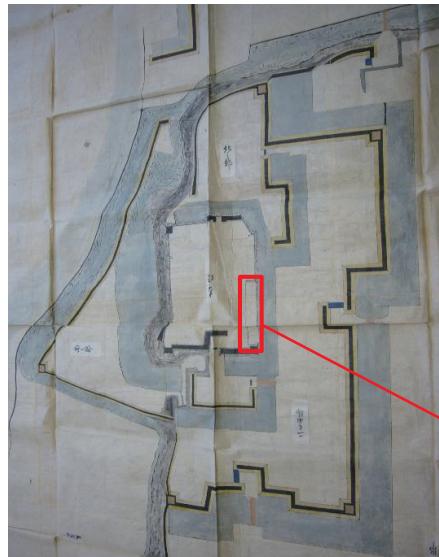
1. 出角石垣

本丸石垣東面の野面積みと布積みの境の築石が算木積みで積まれており(写真①)、その背後では東西方向に延びる埋められた出角石垣を確認しました。出角石垣は野面積みで、確認した範囲での長さは約8.4mです。築石は1~4段積まれていました。出角石垣の上には元禄期に完成した本丸東面石垣の盛土と裏込め石が堆積していることから、天端を含む上部は元禄期に解体されている可能性があります。根石は築城期の盛土の上に置かれ、盛土斜面に合わせて西に向かって登るように据えられていました。根石付近の石垣は築石と間詰め石の面を揃えて積んでおり(写真④)、築城期の石垣の特徴と近似しています。上部では面が揃えられていないことから(写真③)、元禄期以前のある時期に積み直されている可能性があります。また、寛文年間の絵図には同位置に出角石垣が描かれていることから(写真②)、少なくとも寛文年間には完成していたと考えられます。

以上の状況から出角石垣は築城期～寛文年間に構築され、改修されながら本丸石垣東面が完成する元禄期まで機能していたと考えられます。



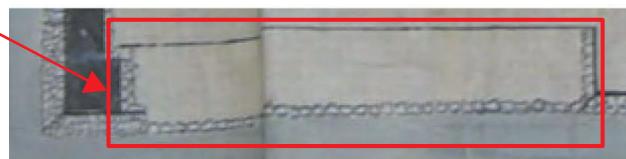
①出角部分立面



②弘前御城之図 寛文年間 (1661～1672)



たか丸くん



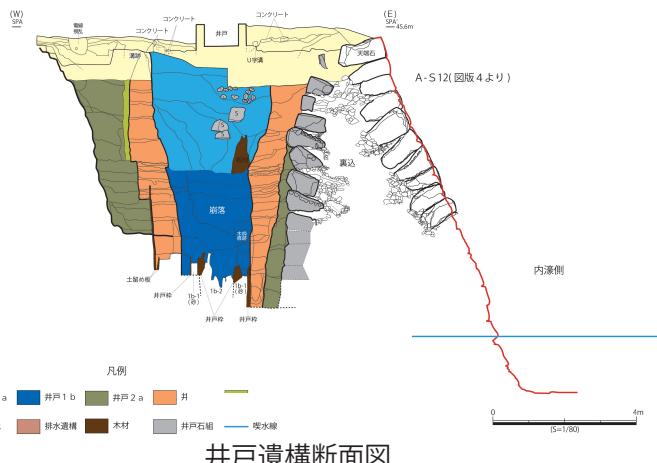
③出角石垣検出状況(南から)



④根石検出状況(南から)

2. 井戸遺構

井戸遺構は出角石垣の南側に位置します。石垣解体工事以前は石製井戸枠が同じ位置に設置されており、昭和初期まで使用されていたと言われています。寛文13年(1673)の絵図にも同じ位置に井戸が描かれていることから少なくともその頃には井戸があったと考えられます。ただし、今回の調査では地表から約8m掘り下げた地点までしか調査を行っていないため、構造が分かったのは元禄期から現代までのものです。元禄期の井戸は掘削範囲が8~9mの円形で大規模なものでした。井戸は本丸東面石垣の積み上げと同時期に構築されたため、石垣側の東壁面は裏込め石が崩落しないように石組が11段積み上げられていました(写真⑥)。掘方の構築土は外側が粘土、内側が粘土と砂の版築土で、その内側に二重の木製井戸枠が設置されていました。掘方壁面や外側と内側の構築土の間には土留め用の板材が設置されていました(写真⑦・⑧)。二重の井戸枠はいずれも方形で、井戸枠間には砂が充填されおり(写真⑨)、差し水をろ過する役割を果たしたと考えられます。井戸の上部は昭和初期の井戸の廃絶時に壊されており、瓦礫が投げ込まれ埋められました。



井戸遺構断面図



⑤井戸遺構上部(近現代)検出状況(北西から)



⑥井戸遺構下部(元禄期)検出状況(南から)



左:⑦土留め板1検出状況(南東から)
右:⑧土留め板2検出状況(北東から)



⑨木製井戸枠検出状況(東から)

3. おわりに

出角石垣は寛文年間～元禄期以前の絵図に描かれていましたが、今回の調査で初めて現存することが明らかになりました。出角石垣は弘前城の初期遺構として歴史的価値が高いことから、解体せずに現状のまま埋め戻して保存する予定です。井戸遺構は元禄期～近現代までのものを確認し、その構造が明らかになり、当時の建造技術や土木技術を知ることができました。井戸遺構は石垣を解体する上で必要な範囲はやむを得ず解体しましたが、出角石垣と同様、下部は解体・調査を行わずに現状のまま保存します。

本丸石垣を含めたこれらの遺構は江戸時代から多くの人々によって守られてきた歴史的価値のある文化財です。今回の修理でも発掘調査の成果を石垣の積み上げ工法に生かして、文化財としての価値を損なわずに構造物としての安全性を確保し、後世に伝えられるよう慎重に作業を進めていきます。